

マトゥラーにおける仏像誕生の状況について [承前]

—マトゥラーの神像崇拜をめぐって—

A Study on the Context behind the Birth of Buddha Images at Mathurā: Focusing on the Cult of Divine Images at Mathurā (Continuation)

永田 郁

Kaoru NAGATA

崇城大学芸術学部美術学科准教授

* Associate Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：マトゥラー、仏三尊像、「菩薩」在銘像、蓮華手、金剛手

Keyword: Mathurā, Image of Buddha Trinity, Buddha images labeled as “Bodhisattva”, Padmapāṇi, Vajrapāṇi

Abstract

This paper is a continuation of last volume, *Bulletin of the Faculty of Art, Sojo University*. The last volume has discussed the context behind the birth of image of Buddha at Mathurā under the Kuṣāṇ dynasty from the view of Folk cults in ancient India. In last volume, it was reported how was the situation of the cults besides the Buddhism. With being based on its context, the situation of the origin of Buddha (Śākyamuṇi) image was reconsidered. The appearance of Buddha images labeled as “Bodhisattva” at Mathurā and its meaning of the term were considered while also introducing more recent opinions such as Prof. Ju-Hyung, Rhi pointed out.

Being based on the last volume this paper discusses the development of Buddha trinity images from the Kuṣāṇ dynasty to the middle of 5th century before Buddhist cave temples of later phase had constructed. A author's view is presented on the reason that introduction of Bodhisattva images as attendants of main Buddha images, compared with Gandhāran art.

緒言

前号『崇城大学芸術学部研究紀要』第7号(2013)において、クシャーン朝マトゥラーにおける仏像誕生の状況について当地の民間信仰および仏教以外の宗教の状況を整理しながら、クシャーン朝マトゥラーにおいて仏像、すなわち「菩薩」在銘像が如何なる状況下において出現したか、その背景を想像してみた。さらに後半においてその「菩薩」在銘像に関して、これまでの見解を整理し、また近年のイ・チュヒョン教授による「菩薩」在銘像に関する新たな見解を紹介しながら、マトゥラーにおける神像崇拜の状況を踏まえながら、マトゥラーにおける「菩薩」と銘した仏像が制作されたかについて若干の考察を試みた。

特に前号で考察したマトゥラーにおける「菩薩」在銘像の存在が古代インドにおいて観音菩薩や弥勒菩薩等の単独の菩薩像を造像させたものの、いわゆる仏三尊像の脇侍にガンダーラのように菩薩像を採用しなかった一因だと考えている。従って、本小論は前号の内容を受け、実作例に即して、クシャーン朝マトゥラー以降、後期の仏教石窟が造営される5世紀中葉までの仏三尊像の展開について整理し、「菩薩」在銘像とともに、仏三尊像の脇侍像に菩薩の導入が古代インドにおいてガンダーラに比して遅れたかについて考えてみたい。

4. インドにおける仏三尊像の展開について

—クシャーン朝～グプタ朝(5世紀中葉まで)—

(1)クシャーン朝マトゥラーの様相

—「一仏二鬼神」の伝統—

まずインド内部で最初に仏三尊像が造像されたクシャーン朝マトゥラーについて見ていきたい。例えば、クシャーン朝マトゥラーの初期の完存した作例として1世紀後半の制作とされるカトラー出土の仏三尊像(「菩薩」銘、図1)では、中尊は菩提樹下に偏袒右肩で結跏趺坐する姿であり、左右に扠子をもつ脇侍像が伴っている。また、2世紀前半の「カニシカ4年銘」の仏三尊像では、中尊はカトラー像に似ているが、相違点として左手の拳を握って左膝上に置いている。そして左右の脇侍像はカトラー出土像同様扠子をもつ脇侍である⁽¹⁾。本像も「菩薩」銘⁽²⁾を有しており、また両者の左右脇侍像についても扠子を執る姿であり、脇侍の姿はターバン頭飾を被り、装身具を身に着け、腰には太い腰帯を巻き、カトラー像においてはショールを肩から掛ける、いわゆるその当時の王侯貴族の服制と変わりない姿をとっている。姿形だけでは脇侍像が神か俗人かの区別が曖昧である。しかし、両者が「菩薩」銘像であることを踏まえ、これまでの議論から、この「菩薩」という表現をそのまま受け止めた場合、自明の理であるが、中尊に従う脇侍像は「菩薩」とは必然的にならない。それではこの脇侍像が何者かというその出自の問題は次の段階を俟たねばならない。

次に単なる払子を執る脇侍像から具体的な持物を執る脇侍像が登場する。それがニューデリー国立博物館蔵のアヒチャトラー出土の「32年銘」の仏三尊像である(図2)。左右脇侍像は中尊向かって右に蓮華の切り花を執る蓮華手像、左に金剛杵を執る金剛手像を執っている。この点については既に拙稿で論じているが、金剛手像についてはその出自がヤクシャであることはこれまで多くの研究者により指摘されている⁽³⁾。蓮華手像に関しては、サーンチー第一塔北門の第二、第三横梁を繋ぐ三本の支柱に中央に菩提樹、左右の支柱に蓮華の切り花を執るヤクシャが侍者として表されている作例⁽⁴⁾やバールフットの銘により「ヤクシャ」と特定できる像が蓮華を執ることやサーンチー第一塔の守門の持蓮華ヤクシャ像からもヤクシャと比定できる。特にこの蓮華手、金剛手の脇侍の組み合わせについてストゥーパの枠組みで考えた場合、左右脇侍の型としては、前述のサーンチー第一塔北門の横梁を繋ぐ支柱の菩提樹と二持蓮華ヤクシャやサーンチー第一塔の守門像にみられる切り花(蓮華を含む)を執るヤクシャ像をベースとし、そこに新たな要素としてガンダーラ美術でみられる仏陀の護衛者である金剛手(ヴァジュラパーニ)⁽⁵⁾を取り込んだのではないだろうか？

以上の点からクシャーン朝マトゥラーの仏三尊像の脇侍の出自はヤクシャとして間違いないであろう。つまり二ヤクシャを脇侍にとっている。入澤崇氏は仏三尊像の起源について仏塔を中心とする鬼神であるナーガ、ヤクシャ、ヤクシーを左右に配する形態がその原初的なものであり、すなわ

ち「一仏二鬼神」の原理が仏三尊像の起源であることを指摘している⁽⁶⁾。例えば図3のナーガに守護されるストゥーパ(アマラーヴァティー出土)は舍利八分の一つのラーマグラマのストゥーパであり、左右にナーガを配置し守護している(図3)。ここでもストゥーパを守護する鬼神の形式がとられ、マトゥラーにおいて新たな信仰対象である仏像が誕生しても、この形式が遵守され、その形がカトラー出土の仏三尊像(図1)へ結実している。単独の菩薩像がクシャーン朝で造像されていたにもかかわらず、仏三尊像の脇侍に菩薩を採用しなかったのは仏塔と鬼神信仰の結びつきの強さがその要因と考えられるのである。

その一方、同じクシャーン朝ガンダーラにおいては初期の仏三尊像として梵天勧請の主題に基づく例(図4)が挙げられ、ここでは梵天と帝釈天が脇侍となっている。その後、例えば3～4世紀頃のペシャーワル博物館所蔵のサハリ・バハロール出土の仏三尊像では、中尊を説法印の仏坐像と向かって左脇侍にターバン頭飾を被り、左手に花綱を執る観音菩薩、右に結髪し、左手の持物は確認できないが恐らく水瓶を執っていたらと推測され、弥勒菩薩とされる脇侍を配している(図5)⁽⁷⁾。この点においてマトゥラーの事情とは異なり、仏三尊像に菩薩を採用することがスムーズに行われたことが窺われる。ここに仏陀像として造像されたガンダーラと「菩薩」銘をもった像として造像されたマトゥラーにおける仏像制作の環境の違いが仏三尊像の脇侍の選択に差異を生じさせたと推察できる。

なお、クシャーン朝後期以降、グプタ時

代にかけてマトゥラーの仏・菩薩の造像を見渡しても、単独の仏・菩薩の造像はみられるものの、菩薩の像例も少ないが、仏三尊像の事例はあまり知られておらず、ガンダーラと比べ絶対量が少ないことから、インド内部における仏三尊像脇侍に菩薩を導入しなかった事情が推察される。この状況は南インド・アーンドラ地方においても同様であり、仏像制作は2世紀末頃から開始されるが、いわゆる脇侍を伴う仏三尊像の作例は確認できない。また仏像が出現しても、仏陀の象徴表現が根強く、仏伝図中でも涅槃の場面は古代初期以来の仏塔で代用しており(図6)、なお仏塔信仰が根強い状況がみられ、アーンドラ地方では菩薩像すら確認できない⁽⁸⁾。こうしたインド内部の菩薩造像の事情を鑑みた場合、やはりそこには仏塔信仰の堅固なパラダイムが存在していたことは明らかであろう。

(2) 5世紀中葉サーンチー第一塔の四仏の仏三尊像について

以上、クシャーン朝マトゥラーにおける仏三尊像の左右脇侍像の出自の問題について具体例を挙げ、整理してきた。次に第二部で展開する後期の仏教石窟の脇侍像を考える上でも、アジャンターの後期窟が造営される直前の5世紀中葉の仏三尊像の様相をみていきたい。

中インド・サーンチー第一塔の四面に設置された四仏(仏三尊像)では、中尊はいずれも禪定印仏坐像で、この四仏の左右脇侍像については既に定金計次氏により報告がなされている⁽⁹⁾。それによると、南面の脇侍像はグプタ時代としては珍しく、い

れも合掌像で向かって左に結髪する梵天、右に宝冠を被る帝釈天(図7)。北面(図8)、東面(図9)の脇侍像はいずれも扠子を右手に執り、向かって右脇侍像は左手に金剛杵を執っているが、摩滅で判別が難しいが北面・東面像では頭部の表現が異なっている。北面像が冠帯の上部の前立部が頭部左にずれており、東面像は南面像と近い冠を被っている。そして、北門・東面向かって左脇侍はいずれも右手に扠子を執り腰帯の結び目に左手を添えている。また、西面像(図10)はいずれも頭部は欠くが扠子を執り左手は腰あるいは結び目に手を添えている。

西面像は具体的な尊格のない扠子を執る像で、ヤクシャかどうか判断する具体的な図像形式は備わっていない。他の三面について言えば南面は梵天・帝釈天の二神、北面・東面に関しては向かって左脇侍像は装身具を着けた像で南面の梵天像とは姿が異なる。定金氏はこれらの像を不確定な西面を除き、梵天・帝釈天と捉えるのが妥当としているが、明らかに南面と北面・東面向かって左脇侍は系統が異なる。また、北面・東面の金剛手像についても両者の表現形式の違いが認められ、帝釈天として同一に扱うには問題が残る。しかしながら、北面・東面向かって右脇侍像が金剛手像であること、また対となる脇侍像が左手を腰帯の結び目に置くこと、この組み合わせはアジャンター後期窟晩期の第26窟の長押の仏三尊像の事例では、向かって右脇侍金剛手像、左脇侍は結び目に左手を置く弥勒菩薩像という事例(図11)があるので、サーンチー大塔北面・東面の発展形と捉えること

も可能であろう。このような状況をみても、仏三尊像の脇侍に菩薩を採用する構想自体、インド内部では起きなかったことは確かであり、ガンダーラ美術の状況とは対照的である。これはクシャーン朝マトゥラーの仏教の新たな信仰対象が「菩薩」と銘打った像で、杉本卓洲氏が指摘するようにそこに一切の生類の救済のために献身的な行為に邁進する英雄及び勇士という菩薩の観念が反映されているとみるならば⁽¹⁰⁾、仏三尊像の中尊＝「菩薩」であるならば、それに従う脇侍は「菩薩」未満の像であり、それにもっとも近しい存在であるヤクシャを含めた民間信仰の神々と考えるのがこれまでのマトゥラーの状況からもその蓋然性が高いと考えられる。

むすび

前号『崇城大学芸術学部研究紀要』第7号(2013)の内容を含め、本小論での議論を整理して結びに代えたい。

前号ではマトゥラーの仏像誕生の状況を作例と銘文資料を通して概観した。特に民間信仰という視点で、まずインド内部での仏像誕生の地であるマトゥラーがどのような宗教的環境であったかを整理し、次にサカ＝クシャーン時代の宗教活動について概観した。

『根本説一切有部毘奈耶薬事』の記述にあったように仏教側からみればマトゥラーはヤクシャたちが蔓延り、乞食がし難い環境であり、そのことはマトゥラーにおけるヤクシャの像例が多数確認できることから推察できた。次にサカ＝クシャーン時代

におけるマトゥラーの宗教活動を概観したが、プトレマイオスの言葉を俟つまでもなく、マトゥラーは「神々の町」としてヒンドゥー教、ジャイナ教、その他ヴィシヌ信仰に組み込まれるヴァースデーヴァ信仰が盛んに信仰され、またナーガ信仰においては仏教と共存して存続していたこともわかり、民間信仰をベースとして、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教それぞれが民間(土着の)信仰を積極的に取り入れていた様相が確認できた。そういった状況の中でマトゥラーにおいて仏像の出現をみるのである。

続いてマトゥラーにおける「菩薩」在銘像に関して、高田修博士および近年のイ・チュヒョン教授の研究を紹介し、これまでの「菩薩」在銘像の見解を整理した。そこで注目されるのが、イ教授の見解であり、「菩薩」在銘像について、仏陀ではなく、成道後の釈迦菩薩であるという見解は非常に興味深く、特にその根拠の一つとして挙げている一種のショールのような着衣は、当時の男性王侯貴族のものを踏襲しているとすれば、それはまさにヤクシャやナーガ、ヴィーラ像などの民間信仰の神々の造形とも共通する点は非常に興味深い。そして、最後にバクティ信仰を受けているナーガ像に付された銘文の願文にある文言「一切衆生の利益と安楽のために」と「菩薩」在銘の銘文の文言が一致するという点、また仏陀が deva や mahādeva と呼ばれる点に注目することにより、仏陀像が神に近い存在として信仰されていたことは、マトゥラーにおいては仏像といえども民間信仰の神々の信仰の目的と同一レベルで制作

され、信仰されていたことが推察されよう。

本小論においては、アジャンター後期窟が造営される5世紀後半以前の古代インドの仏三尊像の展開について、前半部分のマトゥラーの仏像誕生の状況を踏まえて、特に左右脇侍像の出自に注目して考察をおこなった。クシャーン朝マトゥラーにおいてはカトラー出土像やカニシカ4年銘の「菩薩」在銘像の左右脇侍については単なる扨子を執る脇侍像で、そして漸く（カニシカ）32年銘の仏三尊像において向かって左脇侍に金剛手、右に蓮華手といった具体的な持物を執った脇侍像が登場し、その出自がヤクシャであろうと特定した。つまり、そこには仏教美術始まって以来、仏塔の守護神、守門像として取り込んだ民間信仰の神が採用されており、入澤氏が指摘するように「一仏二鬼神」の原理が作用しており、クシャーン朝マトゥラーの仏三尊像において脇侍像に菩薩を導入しない背景には、仏塔と鬼神信仰の強い結びつきがあることがこれまでの考察を通して明らかとなり、仏三尊像の脇侍像に菩薩像をスムーズに導入したガンダーラとは対照的である。

このようなクシャーン朝マトゥラーの「一仏二鬼神」の原理、仏塔信仰のパラダイムの遵守という傾向の中で、5世紀中葉のサーンチー大塔の四面の四仏坐像の脇侍においても南面に梵天・帝釈天といった新たな組み合わせを登場させているが、依然として頑なに仏三尊像の脇侍に菩薩像を導入しない態度を堅持していることがわかった。やはりそこにはクシャーン朝マトゥラーの新たな信仰対象が「菩薩」在銘像であったことが大きく作用しているに相違な

いであろう。さらに言えば上記のような現象が起る根幹にはやはり仏塔信仰が深く関与しており、つまり「仏塔を守護する二鬼神」というインドの伝統的な表現形式が仏三尊像の脇侍像に菩薩を導入させない、または遅らせた正体なのである。この状況こそがアジャンター後期窟において仏殿本尊左右脇侍像および守門像の展開についても底通している問題である。すなわち、守門像については「ヤクシャ」である蓋然性が高いが、同様に仏殿左右脇侍像についても、伝統的なヤクシャ像をベースに、そこに新たな菩薩の要素を付加していく形で、ヤクシャ像から菩薩像への展開の造形的な試みがなされていく。筆者はこの段階を「ヤクシャの菩薩化」として、その原理のもと、後期の仏教石窟の仏殿本尊の脇侍像を構想し、順次菩薩像へと脇侍像が置換されていくことをこれまで跡付けてきた⁽¹⁾。まさにその原理の根幹にあるのは、インド、すなわちマトゥラーにおいて、仏教に関する新たな信仰対象（仏像）が「菩薩」銘を有していた点にある。この「ヤクシャの菩薩化」という原理を想定することにより、古代インドにおけるクシャーン朝以降の仏教尊像の展開が民間信仰の神々の影響を受けながら、つまり「土着化」という過程を経て、新たな尊像へ昇華するというインド固有の尊像生成の様相が明らかとなったと言える。

[註]

- (1) 肥塚・宮治（2000）『世界美術大全集 東洋編13 インド(1)』図版67. 参照。
- (2) 銘文に関しては、肥塚・宮治（2000）、

- pp. 386-387. 参照されたい。
- (3) 拙稿 (2005) 「古代インドの蓮華手ヤクシャと観音菩薩との関係について—「ヤクシャの菩薩化」をめぐる問題—」『密教図像』第24号、註(10)参照。
- (4) 拙稿 (2005)、註(11)参照。
- (5) ガンダーラの仏伝図において「出城」以降の場面では頻繁に執金剛神 (ヴァジュラパーニ) が姿を現す。宮治昭 (1992) 『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館、p. 125.
- (6) 入澤崇 (1986) 「ヴァジュラパーニをめぐる問題」『密教図像』第4号、pp. 56-59.
- (7) 宮治昭氏はガンダーラにおける仏三尊像の40作例から左右脇侍を詳細に整理されている。宮治昭 (1992)、第Ⅱ部第二章 ガンダーラの三尊形式の両脇侍菩薩像の図像 (pp. 245-280) および pp. 278-279. 「表2 ガンダーラ三尊形式の両脇侍像一覧」を参照されたい。
- (8) 南インド、アーンドラ地方で菩薩像が造像されなかったのかという問題については次の拙稿を参照されたい。
永田 (2008) 「南インド・アーンドラ地方の宗教美術の様相について—「なぜ菩薩像は造像されなかったか」を巡って—」『崇城大学芸術学部研究紀要』第2号、pp. 69-89.
- (9) 定金計次 (2001) 「1. インド仏教石窟における脇侍としての観音菩薩及び対をなす菩薩像の図像的展開—中世初期以前について—」『インドから中国への仏教美術の伝播と展開に関する研究』(平成10~12年度科学研究費補助金研究成果報告書)、p. 293.
- (10) 杉本卓洲 (1983) 「Yakṣa と菩薩— Mathurā の仏教をめぐる—」『金沢大学文学部論集 行動科学編』第3号、p. 102.
- (11) 拙稿 (2002) 「アジャンター石窟における守門像について—第十九窟ファサードの守門ヤクシャ像を中心に—」『美術史』第153冊、pp. 15-30.
註3 拙稿 (2005) pp. 16-30.
拙稿 (2007) 「西デッカン地方の後期仏教石窟における仏殿本尊脇侍像・守門像について」『美学美術史研究論集』第22号、pp. 33-53.
「アジャンター後期窟における仏殿本尊脇侍像の形成について」(第77回九州藝術学会) [沖縄県立芸術大学2007. 11. 24] における口頭発表)

[参考文献一覧]

- ・入澤崇 (1986) 「ヴァジュラパーニをめぐる問題」『密教図像』第4号、pp. 55-63.
- ・肥塚・宮治 (2000) 『世界美術大全集 東洋編13 インド(1)』、小学館.
- ・定金計次 (2001)、「1. インド仏教石窟における脇侍としての観音菩薩及び対をなす菩薩像の図像的展開—中世初期以前について—」『インドから中国への仏教美術の伝播と展開に関する研究』(平成10~12年度科学研究費補助金研究成果報告書)、pp. 285-326.
- ・杉本卓洲 (1983) 「Yakṣa と菩薩— Mathurā の仏教をめぐる—」『金沢大学文学部論集 行動科学編』第3号、pp. 79-108.
- ・東京国立博物館他編 (2002) 『パキスタン・ガンダーラ彫刻』展図録、NHK.
- ・東武美術館他編 (1988) 『ブッダ 大いなる旅路』展図録、NHK.
- ・永田 (2002) 「アジャンター石窟における守門像について—第十九窟ファサードの守門ヤクシャ像を中心に—」『美術史』第153冊、

pp. 15-30.

- ・永田 (2005) 「古代インドの蓮華手ヤクシャと観音菩薩との関係について—「ヤクシャの菩薩化」をめぐる問題—」『密教図像』第24号、pp. 16-30.
- ・永田 (2007) 「西デッカン地方の後期仏教石窟における仏殿本尊脇侍像・守門像について」『美学美術史研究論集』第22号、pp. 33-53.
- ・宮治昭 (1992) 『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館.

【図版典拠】

本小論で使用した図版は図4、5以外は筆者の撮影によるものである。

図4は東武美術館他編 (1988) 『ブッダ大いなる旅路』展図録、図版 No. 28、図5は東京国立博物館他編 (2002) 『パキスタン・ガンダーラ彫刻』展図録、NHK、図版15より転載したものである。



図1 仏坐像(「菩薩」銘)
カトラー出土 マトゥラー博物館



図2 仏坐像(32年銘 蓮華手・金剛手脇侍を伴う)
アヒチャトラー出土
ニューデリー国立博物館



図3 ナーガに守護されるストゥーパ
アマラーヴァティー出土
チェンナイ州立博物館



図4 梵天勸請
スワート(パキスタン)出土
ベルリン国立インド美術館



図5 ガンダーラの仏三尊像
サハリ・バハロール出土
ペシャーワル博物館



図6 仏伝四相図
アマラーヴァティー出土
チェンナイ州立博物館

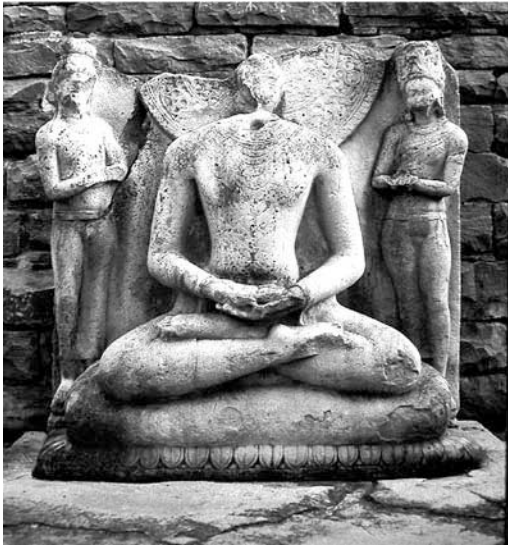


図7 仏三尊像（南面） サーンチー第一塔

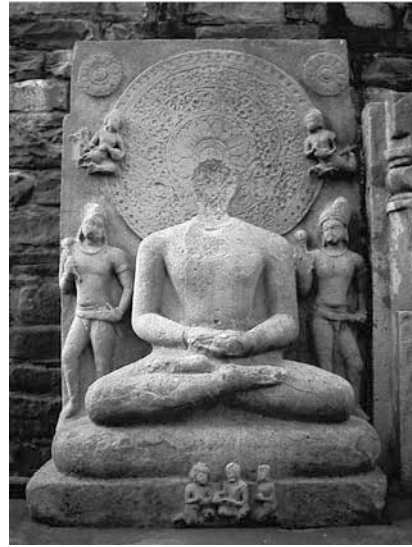


図8 仏三尊像（北面） サーンチー第一塔



図9 仏三尊像（東面） サーンチー第一塔

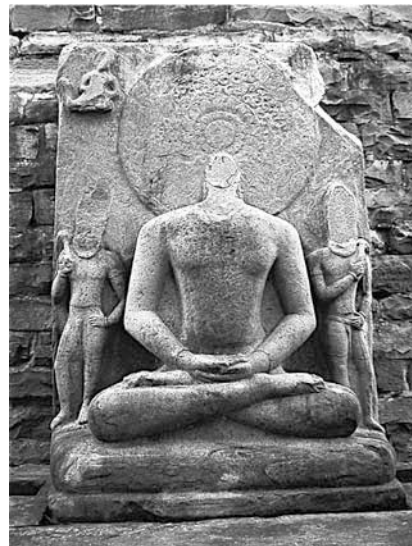


図10 仏三尊像（西面） サーンチー第一塔



図11 仏三尊像および左右脇侍像
 (向かって左: 弥勒菩薩 / 右: 金剛手像)
 アジャンター第26窟内部長押